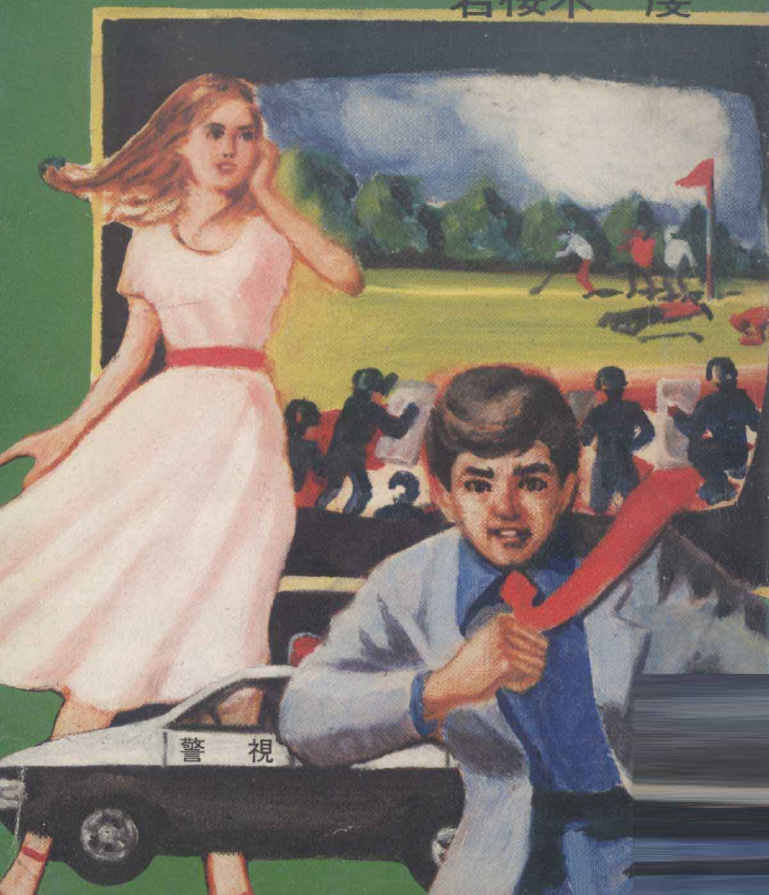
少年検事　白鳥　暁シリーズ③

グリーン予告殺人事件

若桜木　虔（わかさぎ　けん）



秋元文庫

グリーン予告殺人事件

昭和53年4月30日　発行

定価はカバーに表
示してあります。

■著者紹介

若桜木　虔
（わかさきけん）

昭和22年静岡生まれ
東京大学農学部卒業
日本ジャーナリスト・クラブ
会員
秋元文庫には
「小説沖田総司」
「沖田総司惜別詩」
「コバルトブルー誘拐事件」
「ダークブラウン強奪事件」
がある。

現住所　〒166
東京都杉並区成田西2-18-28

著　者■若桜木　虔
発行者■秋　元　英　子
発行所■株式会社 秋元書房
■〒162　東京都新宿区赤城下町42
電話 東京(268)0758(代)
振替 東京 2 7 0 4 7

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

印刷＝暁印刷　製本＝大和工業

© KEN WAKASAKI 1978　0193-E063-0029

秋元文庫

グリーン予告殺人事件

若桜木　虔著

秋元書房

目次

プロローグ　緑色の発端（ほったん）　7
第一章　緑色の予告　13
第二章　緑色の殺人　35
第三章　緑色の解析（かいせき）　65
第四章　緑色の金券　93
第五章　緑色の逮捕　128
第六章　緑色の解明　151
第七章　緑色の逆転（バックスマ）　184
エピローグ　緑色の洗礼　208
あとがき　212

カバー・さし絵　黛　旭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

主人公

白鳥　暁(15)

検事総長の息子。両親が離婚し、母と共にアメリカで育ち、天才児として、十歳で大学院を卒業するが、母の死により、日本の父に引き取られる。

十二歳で司法試験に合格、二年間の研修期間を終え、検事となる。

東京地方検察庁検事補。

永原真由美(15)

白鳥暁のガールフレンド。光菱商事社長令嬢で、小学校以来首席を通している才女。

富士学院中学三年生。

グリーン予告殺人事件

プロローグ　緑色の発端

「どうしたの？　今日はちっともさえなかったじゃない？」
暁とパートナーを組んだ混合ダブルスの練習試合に一方的に勝って、真由美はネット越しに、対戦相手の奈良美貴子に話しかけた。
いつもなら抜群の勘で球筋を読んで、スッと前に出てくる美貴子のネットプレイが、終始見当違いの動きばかり見せていたのだ。
「顔色も何となく悪いし……何か心配事でもあるの？」
「それが……」
ラケットをケースにしまいながら、不安を抑えきれない様子で美貴子は答えた。
「昨日なんだけれど、祖父の所に変な手紙が来たの」
「変な手紙、って……ひょっとして、脅迫状か何か？」
美貴子は重々しくうなずいた。
真由美は、ゆっくりと近づいてくる暁の方を振返った。
「ねえ、白鳥君。事件よ！」
「事件？」

「美貴子さんのお祖父さんの所に、脅迫状が届いたんですって」
「脅迫状？　詳しく話してみて下さい」
〈脅迫状〉と聞いたとたんに、暁は仕事をしている時の緊張した顔になった。
暁はまだ十五歳だが、アメリカのブリガム・ヤング大学を卒業し、日本の司法試験に合格した、れっきとした東京地方検察庁の検事なのだ。
「ギクシャクとした字体で、毒々しい緑色のインクで書かれていたんですけれど――文面はこんなでした。〈命が惜しければ、十億円を用意しろ。貴様は、権力と栄光を己れの欲しいままにした。十億円は、その代償だ〉……」
ウーム……と暁はうなった。
「〈権力と栄光〉というのは、グレアム・グリーンというイギリスの作家の代表作の名前だけれど――」
「それじゃ今度は、グリーンで統一した脅迫状、ってわけ？　〈ダークブラウン強盗事件〉の時と色違いというだけで、まるで同じ発想ね」
「影響を受けたのかも知れないし、そうじゃないのかも知れないけれど――とにかくその、脅迫状の現物を見せてもらえませんか？」
「ええ。それじゃあ、これから私の家にいらっしゃる？」
美貴子の家は、杉並区の高井戸東一丁目にあった。
暁と真出美が、毎週土曜日の午後デートを兼ねてテニスを楽しむ、浜田山四丁目のこの光菱ク

ラブ・テニスコートからは、南に徒歩約十分の距離である。
「美貴子さんのお祖父さんは、経済団体連合会の会長をなさっているんでしたっけね？」
「ええ、光菱重工の会長から、推されて経団連の会長に――もう八十歳近いんですけれど、まだ六十代みたいにピンピンしているんです」
自転車を並べて走らせての道で、美貴子は祖父の奈良辰雄について話したが、その話の終わらない内に、高い石塀を回した広い奈良邸に着いていた。
黒い鋼鉄製の門扉を押して中に入ると、よく手入れされた芝生の上で、頭のテカテカに禿げあがった老人が、ゴルフのパターの練習をしているのが目に映った。
「お祖父さん――」
呼ばれて、辰雄氏は三人の方を振返った。
「お帰り。美貴子の友達かね？」
「ええ。光菱クラブのお友達で、白鳥暁君と永原真由美さん――」
辰雄氏は、クラブを手に下げたまま近づいてきた。
「永原さんというと、光菱商事の永原英一郎君の娘さんかね？」
「はい」
真由美は、笑顔を見せて頭を下げた。
「白鳥君というのは？」
「東京地検の検事さんよ――」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

美貴子の説明を聞いて、辰雄氏は大きくうなずいた。
「君があの白鳥君かね。美貴子の友達とは思わなかったな。誘拐事件や銀行強盗事件では、素晴らしい推理を働かせて活躍したそうじゃないか」
「とんでもありません。ところで美貴子さんから、脅迫状が届いた、という話を伺ったんですが？」
「なーに――」
辰雄氏は笑って、大きく手を振って否定した。
「あんなものは、ただの悪戯じゃよ。脅迫状などをいちいち気にしとったら、経団連の会長などは一日もつとまりゃせん」
「そうすると、脅迫状は？」
「捨ててしまったわい。何も心配することなどありゃせんよ。脅迫状など、今まで何百通受け取ったか知れんが、それが全部本当だったら、わしなど少なくとも五十回は死んどるだろうな」
美貴子の心配をよそに、辰雄氏は高笑いしてみせると、ゴルフの練習を再開した。
「まあ、ゆっくり遊んでいって下さい」
それきり暁や真由美の存在を忘れてしまったかのように、白球を芝生の上を転がすことに熱中している。
（この図太さがあるからこそ、日本の財界の指導者として、高齢にもかかわらず立派に働けるんだろうけれど……）

と暁は思ったが、辰雄氏のアッサリとした否定にもかかわらず、妙な予感が胸の奥でくすぶって離れない。

いわば、検事という犯罪捜査にたずさわる職業に特有の、第六感だった。

「どうするの？」

と、真由美。

「肝心の脅迫状がないんじゃ、捜査を始めようにも仕方がないなあ……」

「そんなことを言っていないで！」

「とにかく身辺警備を厳重にしてもらう以外に、今のところは方法がない。——ちょっと電話をお借りします」

「はい。こちらです——」

美貴子は二人を、邸内の応接室に案内した。

どうやら親子電話で、各室に一つづつ受話器が置いてあるらしい。

「すみません。お祖父さんたら、人の気も知らないで……」

「いえ、いいんですよ——」

暁はダイヤルを回した。

経団連会長のようなＶＩＰ（重要人物）の身辺護衛は、警視庁警備部警護課がその担当である。

「はい、警視庁——」

「東京地検の白鳥ですが、警護課長の有泉警視をお願いします」

「少々お待ち下さい」
（運が良かったな……）
と暁は思った。
土曜日の午後ともなると、課長などの地位にある人間は帰ってしまっていることが多いからである。
しばらく小さな呼び出し音が聞こえて、有泉警視が出た。
「有泉ですが――」
「地検の白鳥です。実は、経団連会長の奈良辰雄氏の所に、〈命が惜しければ十億円用意しろ〉という脅迫状が舞い込みましてね」
「ほう!? その脅迫状をお持ちですか？」
「それがあいにく、奈良氏が捨ててしまわれたらしいんですが――奈良氏の身辺警護を厳重にしていただけますか？」
「承知しました。人員を増やすことは現状では不可能ですが、三交代で、二十四時間護衛体制をとらせましょう」
「宜しくお願いします」
と、暁は受話器を置いて二人を振返った。
「この程度で、未然に犯罪を防止することができればいいんだけれど……」

第一章　緑色の予告

1

奈良家に脅迫状が来た、という話があってから、五日ばかり後のことである。

暁が机に向かって書類に眼を通していると、ドアにノックの音がして、真由美と美貴子が入ってきた。

「いらっしゃい――」

と言いかけて、暁は、心なしか美貴子の表情が蒼ざめているのに気づいた。

「何かあったんですか？」

「祖父あてに再た脅迫状が届いたんです。それで、それをお見せしに……」

美貴子はハンドバッグの中から、淡いグリーンの封筒を取り出して寄越した。

「拝見します――」

暁は自分の指紋が付かないように手袋をはめて、封筒を開いた。

表書きも便箋の上の文字も、緑のフェルトペンを使った角ばった字で、筆跡を巧みに隠している。

身代金の十億円は用意できたか？　用意できたら、次の文面で三大新聞に広告を掲載しろ。
〈みどり　全て了解した　奈良雄〉
三日以内に広告が載らなければ、私の要求を拒否したものと見なし、お前の命をもらうことにする。

グリーンの男より

「なるほど。それで、奈良氏は？」
「この前と全く同じなんです。心配しているのは家族だけで、本人はまるで気にしていません」
「とにかく、この手紙をすぐに警護課の有泉警視に見せて、相談してみましょう」
「よろしくお願いします」
と、美貴子は不安そうに頭を下げた。
電話を入れて有泉警視の在席を確認しておき、二人を連れて地検の庁舎を出る。
東京地検から警視庁までは、直線距離にして約四百メートル、タクシーを使うような距離ではない。
五分で警視庁に到着した三人は、警護課長室に有泉警視を訪ねた。
真由美と美貴子を紹介した暁は、早速本題に入って脅迫状を見せた。
「ふむ。これは、捜査一課にも応援を頼む必要がありそうですな。それと、無駄でしょうが、鑑

識課にも手紙の検査を依頼して、と……」

有泉警視は、インタホンで刑事を呼んで脅迫状を渡し、鑑識課に持ってゆくように指示を与えた。

「それで奈良氏は、十億円についてはどうなさるおつもりなんです?」

「祖父は、完全に無視するつもりでいます」

と、美貴子が答えた。

「ふむ。いずれにしても、脅迫状の文面によれば、三日間は余裕があるわけだが……」

「これまでの五日間、二十四時間の身辺護衛体制をとってきて、どうでしたか? 何か怪しいことでも——」

「いや。これといって変わったことは何も——それよりも奈良氏は、非常に護衛がやりにくい人物ですな」

「それはどういうことです?」

有泉警視はニヤリと笑った。

「そもそも奈良氏は、我々警察官の護衛がついていること自体、お気に召さんらしいんですな。私服警官が、覆面パトカーでそれとなく護衛しているわけなんですが、すぐに色々な手を使って撒(ま)こうとなさるんですよ」

「まあ!」

美貴子が、呆(あき)れたような声を出した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erto